

声調語話者に共通する日本語アクセント

——タイ語話者，ベトナム語話者，広東語話者の場合——

安 原 順 子

1 はじめに

発音には，個人差がある。音声指導を行う場合は，個人差を十分に考慮した音声指導が望ましい。しかし，日本語学習者への音声指導を，できるだけ効率よく行うためには，個人差の関与を少なくした，最大公約数的，かつ一般化された音声指導をも考える必要がある。

岩田（1997）は音声の個別性について，次のように述べている。

音声の対照研究には，個別性に二通り，即ち言語に固有な個別性（言語差）と個人に特有な個別性（個人差）がある。言語学者の関心は，当然言語差の方に集まるが，そこで個人差をどのように排除するかが問題となる。また，特にピッチの上げ，下げの場合は，個人差として扱われることが多く，言語差の解明を目的にしていない。

本稿では，個人差についても考慮しながら，先に述べたように最大公約数的な音声指導を目指し，声調語話者であるタイ語話者，ベトナム語話者，広東語話者の日本語のアクセントの共通点について考察する。日本語を学習する声調語話者には，音声面でも，声調語話者に共通する点があると考えられる。タイ語話者，ベトナム語話者の共通点については，安原（1994，1998）ですでに述べられている。本稿では，さらに声調語話者のアクセントの特徴を一般化するために，広東語話者の特徴を取り上げた。また，アクセントの分析の際には，新たにポーズについての分析を付け加えて，声調語話者のアクセントの共通点の一般化を目指すことにした。

2 先行研究

広東語話者の日本語アクセントに関する先行研究として，野沢・重松（1998，1999）では，広東語話者のアクセントの特徴を次のように述べている。

「平ら」がその特徴である。

(2)

①長音節・撥音節・二重母音音節については「高く平ら」であるが、語末では「低く平ら」が多くなる。

②促音説については、「低く出る」ことが多い。

③これらの音節（促音説を除く）が連続して出現した場合、語末を除いて「高く平ら」が続く傾向にある。

広東語話者が日本語を発音する際には、母語の広東語の音節に引き付けて、その tone-sandhi の特徴である「平ら」というピッチを日本語に適用していると考えられる。また、日本語の漢語には平板型が多いため、広東語話者がそれを「高く平ら」と聞き、その結果、「平ら」の中でも「高く平ら」を選択すると推測される。

野沢・重松(2000)では、さらに広東語話者のアクセントの特徴を以下のように述べる。

広東語の開音節には、長音節・撥音節・促音節・二重母音音節の調査で見られたような圧倒的に「平ら」が多いという現象は見られない。共通して言えることは、「一拍目が低く出る」という点で、これは拍数にかかわらず。低く出た後は、3、4拍で「高く平ら」に進行するが、これは「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について(1)(2)」で述べた「平ら」傾向に合致するものである。拍数が増えるに従って、パターンは分散していき、個人の癖も現れてくるため、傾向も特定しにくくなる。

このことは、広東語に日本語の1拍に相当する長さの開音節の連続語がないため、広東語の音節に引きつけて発音することにより声調の影響が弱まり、一定のパターンに集約されずに、さまざまなパターンがあることを示唆している。

しかしながら、この結果は以下の実験で得られた結果と必ずしも合致しない。以下に述べるとおり、広東語話者とタイ語話者、ベトナム語母語話者には、日本語を発音する際、同じようなアクセントの型が見られる。その共通点の一つとして、二拍語のアクセントでは、「低く出る」というアクセントよりも高低アクセント、つまり一拍目が高く、二拍目低いアクセントの方が多く見られるからだ。

安原(1994)では、タイ語話者とベトナム語話者の促音アクセントについて述べているが、その中で促音アクセントは、それぞれの母語が持つLHの音調が付加され、三拍語は二拍語として発音されると述べられている。また、安原(1999)では、タイ語話者とベトナム語話者のその他のアクセントの共通点についても触れている。

3 実験方法

以上のような先行研究の結果を踏まえ、その問題点を視野に入れながら、次のような方法で、タイ語話者、ベトナム語話者、広東語話者のアクセントを音読によって採取し、そ

れを分析した。

タイ語話者、ベトナム語話者、広東語話者二名ずつに、それぞれ二種類の文章を朗読してもらい、それを録音し、アクセントの分析を行った。六名とも、日本語学習歴は、1年から3年である。音読には、^{注1}『新聞で学ぶ日本語』の「52 空き教室転用の高齢者福祉施設」、「53 充実する海外挙式ツアー」を使用した。音声の録音時には文章を読ませ、単語音声のみを対象にしなかったのは、単語音声のみの録音では、自然な形の音声の録音が困難だという考えからである。野沢・重松(2000)では、単語のみを録音採取して分析を行っているが、そのような採取の方法では、単語の発音は正確になるが、どうしても語頭の音声が高アクセントになりやすい。これは、文中ではなく単語別の発音にすると、より語頭の音声を意識でき、特に日本語らしく語頭を低アクセントで発音しようとするためであると考えられる。ただし、これにも個人差は存在する。例えば、日本語の学習期間やアクセントに対する認識の違いなどである。そこで、より正確な発音の採取のために、文章の音読によるアクセントの採取方法を採用したのである。

「A 空き教室転用の高齢者福祉施設」

結婚식을海外で挙げる人が増えるのを見越して、旅行会社が海外挙式ツアーの内容を充実させている。昨年海外で挙式した日本人カップルは三万五千組と推定され、一九九〇年の約三倍である。行き先はほとんどがハワイ、オーストラリア、グアム。カップル以外の同行者は平均五人で、近親者だけで渡航する例が多い。担当者は人気の理由を、おしゃれなイメージに加えて、国内での挙式より安上がりで、しきたりやしごらみを敬遠する若者の気分に合っているからだとしている。

「B 充実する海外挙式ツアー」

京都府のある小学校に、児童数の減少のためできた空き教室を転用した高齢者福祉施設ができた。全国初の試みだが、もうすぐ一年になる。初めは校内で出会うお年寄りととまどっていた児童も、今では昼休みや放課後に施設に出かけ、手伝いをしたりいっしょにゲームをしたりしている。児童たちは「お年寄りがとても物知りなので驚いた。方言や手芸などを教えてくれるので楽しい」と毎週の交流の日を心待ちにしている。

4 声調語の共通点

声調語話者のアクセントの共通点を見い出すためには、まず、声調語話者の母語であるそれぞれの声調語そのものに、何らかの共通点があるかどうかを比較してみる必要がある。もし、そういう特徴が存在するならば、それは日本語を発音する際にも、共通した特徴とし

(4)

て現れるのではないかと考えられるからだ。

声調語話者の共通点については、声調という特殊な機能を持った言語であり、声調語を母語とする日本語学習者には、必ず特有の日本語の音声が見られるはずである。タイ語、ベトナム語については、安原（1994，1999）においてすでに考察されている。

ここでは、タイ語、ベトナム語、広東語に共通する声調語の特徴を見つけるために、以下のように、タイ語、ベトナム語、広東語の声調を示し、比較・検討する。

H は High tone, M は Mid tone, L は Low tone, ML は Mid-low tone を示す。声調語の基本的な音域は、High, Mid-high, Mid, Mid-low, Low の五段階である。このため、日本語の音域から考えると、音域はかなり幅広く、音が幅広く上下すると考えられる。

注 ² タイ語	a M	à L	â H-L
	á L-H	ǎ L-M	
注 ³ ベトナム語	ā H	à L	á L-H
	ǎ L-M	a° L°	
注 ⁴ 広東語	ā H	a M	á M-L
	á MH	â ML-M	ǎ ML-L
			à H-L

これらの声調には、次のような共通の声調が見られる。

- ①語末が閉鎖音で終わる低から高への音調。
- ②高から低への落ちる音調。

5 声調語話者の日本語リズムの共通点

次に、声調語としての特徴点が、日本語のアクセントにどのように現れるかについて考察する。

アクセントの型については、それぞれ二名の音読者のうち、一名または、二名ともが同じアクセント型を示したもののみ、共通の特徴として取り上げている。

5-1 促音

促音アクセントについては、安原（1994）にもみられるように、タイ語、ベトナム語の母語話者については、特別なアクセントの型がみられる。今回の録音にも、文章中に、それと同じく次のような型がみられ、同時に広東語話者二名の促音アクセントにも同じ特徴が見られた。

日本語のアクセント		声調話者のアクセント	
ke kko nshiki	→	kek konshiki	結婚式
		kek konshi ki	
ka ppuru	→	ka ppuru	カップル
a tte	→	a tte	合って
to ma do tte	→	to ma do tte	とまどって
i sshoni	→	i sshoni	いっしょに
to ttemo	→	to ttemo	とつても

日本語の促音は、正しい日本語のアクセントにかかわらず次のように発音される。

- ①促音の前後音とともに発音される。
- ②これにLHまたはML-Hという低高アクセントが付加される。

重松(1999)では、台湾語話者のアクセントを取り上げて、促音について次のように述べている。

促音のついた音節は、2拍にならず少し長めの1拍となる。従って、「はじまった」は4拍に「かわった」はほとんど3拍に聞こえる。このことはこれまで、促音付きの音節を台湾語の入声韻尾の音節で代用するためといわれてきたが、それには少々疑問がある。というのは台湾語には入声韻尾という内破音の音節があるので、p, t, k, のどの内破音であるかには非常に敏感だが、それと聞こえの長さが直接結びつく要素はなく、聞こえない1拍文の促音を意識して入声韻尾の音に置き換えるとは考えられないからである。そう考えるより、撥音付きの音節の撥音の拍は意識化されておらず、促音の後にくるp, t, kなどが台湾語の無声無気音で代用されて、閉鎖時の緊張を受けるために、我々にはあたかも入声韻尾のように聞こえる则认为の方が自然である。

声調語の特徴の一つにこの促音の発音を取り上げるなら、台湾語話者も、タイ語話者、ベトナム語話者、広東語話者と同じく、共通した促音節の発音の方法を持っていることになる。促音の代用とされる入声韻尾は、声調の日本語アクセントへの影響を考えれば、むしろ語末の入声音は促音節の発音に使用されていると考えてよいはずである。

5-3 高低アクセント

特殊拍を含まない二拍語、三拍語のアクセントは、平板化して、高さが持続するものが

(6)

日本語のアクセント		声調話者のアクセント	
ho oge n	→	hoogen	方言
shu gei	→	shu gei	手芸
ma ishuu	→	ma shuu	毎週
ko oryuu	→	kooryuu	交流
kyo shiki	→	kyo shiki	拳式
ka igai	→	kaigai	海外

多い。また、平板化したアクセントの最後の拍だけが低くなるものもみられる。

野沢・重松(1990)では、アクセントの平板化について、tone - sandhi の影響で、このような平板化がみられると述べている。しかしながら、このように平板化がみられる原因は、tone - sandhi の影響ばかりではない。安原(1998)にも述べられているように、日本語の音声より幅広い五段階の音程を持つ声調話者には、日本語の二段階しかない音域は、アクセントとして認識するには、不十分な音域なのである。また、日本語のアクセントについての知識が少ないため、どのような音程で発音すればよいかわからない場合もあると考えられる。これについては、これら声調話者を対象にしたアクセントの認識度調査により、日本語のアクセントの認識度を測り、検証することができるであろう。

5-4 長音化

語末の拗音は拗長音になる。特に、助詞の前は長音化しやすく、HLという高低のアクセントを付ける。

語末に拗音がきた場合に、次のように共通した特徴が見られた。

日本語のアクセント		声調話者のアクセント	
ka isha	→	kaishaa	会社
ki nshi nsha	→	kinshinsha	近親者
do oko osha	→	dookoosha	同行者

5-5 ポーズとアクセントの関わり方

ここで扱うポーズとは、息継ぎのことである。録音の分析時に、ポーズについてもアクセントと同じように分析を行った。

ポーズについては、ポーズの取り方のそのものに共通点をあげることにはできないが、ポーズの回数と読みの正確さには共通点があるといえるだろう。

次にポーズと今までにあげた共通点との関わり方をみる。ポーズのとりすぎは、正しい発音にはつながらない。しかし、上手にポーズをとることが、アクセントの正確さにも関わり、重要である。

促音とポーズ

録音した文章中、促音を含む語は、6語であった。しかし、それを文章中のどの場所にあるかによって区別すると、文頭に位置していたのは2語、文中に位置していたのは4語であった。さらに、文頭と文中という区別ではなく、ポーズの取り方によって区別してみると、直前にポーズがあるものは4語で、直前にポーズがない2語のアクセントは、以下のようであった。

日本語のアクセント	→	声調話者のアクセント	
Ni honjin ka ppuru		Ni honjin [∨] ka ppuru	日本人カ ッ プル
a tte		[∨] a tte	気分に合 っ て

このように促音は、促音節の前にポーズが入ることで、正しいアクセントになりやすいという結果が出た。

長音化とポーズ

助詞の前の語末の拗音が長音化し、それに高低のアクセントが付加されるのは、助詞の後には一般的にポーズが入り、そのため、助詞の挿入によりリズムをとりやすくしようとしているためかもしれない。

しかし、ポーズとの関連でいえば、長音節を含む語の直後では、長音化は起こらない。

日本語のアクセント	→	声調話者のアクセント	
ko ore isha hu kushi shi setsu		ko ore isha hu kushi shi setsu	高齢者福祉施設

6 結論

以上のように、音読を分析した結果、次のようなことが明らかになった。

タイ話話者、ベトナム話話者、広東話話者には、声調話者としての日本語アクセント

(8)

に現れる共通点が存在する。

①促音アクセントには、低高のアクセントが付加され、一音節として発音される。

②アクセントの型は、高アクセントが連続する型と、語末の一拍のみが低アクセントになる型が多く見られる。

③語末の拗音は、拗長音に変化しやすい。

④ポーズの入れ方により、アクセントの型は変化しやすい。特に、促音と拗音の発音の際には、ポーズの取り方で、アクセント型が変化する場合がある。

7 おわりに

声調話者には、日本語のアクセントの発音において声調話者のみが持つ問題点がある。そして、これらの特徴を、音声指導に利用することにより、初級者の音声指導とともに、それ以上のレベルの学習者にも音声の矯正指導を行うことができる。

例えば、ポーズの取り方によって、声調話者のアクセントが変化するという事実から、語頭を低アクセントにしたい場合は、まず、ポーズの後に単語を置いて低アクセントの練習をすればよいことが分かる。また、拗音の長音化を防ぐには、長音化が起こらない複合語のような語の中で、まず拗音の練習をすればよいのである。

ここで取り上げた三種類の声調語以外にも声調語は存在する。たとえば、台湾話話者では、促音アクセントの問題点は本稿の声調語に共通しているが、平板化したアクセントが多いという問題は、重松(1997)による台湾話話者の特徴には当てはまらない。しかし、同じく声調語でありながら、台湾話話者のみまったく異なる特徴を持つものではないはずである。これらの相違点を解明し、声調話者の日本語アクセントの問題点をどのように一般化し、音声指導に役立てられるかは、今後の研究課題としたい。

注

- 1 『新聞で学ぶ日本語』(1997) ジャパンタイムズ
- 2 タイ語はバンコク方言。タイ語の声調表記は、安原(1994)による。
- 3 ベトナム語はサイゴン方言。ベトナム語の声調表記は、安原(1994)による。
- 4 広東語の声調表記は、Bauer, Benedict(1997)による。

参考文献

- 岩田礼(1997)「声調言語に於けるピッチの”上げ”と”下げ”について—タイ語、蘇州語の筋電図—」『音声研究』第1巻第3号
- 大西晴彦(1999)「方言別中国話話者の日本語アクセント—呉語、湘語、贛語、北方語—」

『国際学友会日本語学校紀要』 vol.22

重松淳 (1995) 「台湾語話者の日本語アクセント考」 『日本語と日本語教育』 第24号

西田龍雄 (2000) 『東アジア諸言語の研究 I』 京都大学出版会

野沢素子・重松淳 (1998) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について (1) 長音節を中心にして」 『日本語と日本語教育』 第27号

野沢素子・重松淳 (1999) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について (2) 一撥音節, 促音節, 二重母音音節を中心にして」 『日本語と日本語教育』 第28号

野沢素子・重松淳 (2000) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について (3) 開音節を中心にして」 『日本語と日本語教育』 第29号

安原順子 (1994) 「声調語話者の日本語の促音アクセント—その特徴と矯正—」 『神戸女子大学文学部紀要』 27巻

安原順子 (1999a) 「英語話者と日本語話者の日本語の音調」 『神戸女子大学文学部紀要』 32巻

安原順子 (2000) 「発音レベルを考慮した日本語の発音指導」 『神女大國文』 第11号

Robert.S.Bauer, Paul K.Benedict (1997) *Modern Cantonese Phonology*. Mouton de Gruyter